

# 現代美術と科学研究

井上 佳久  
いのうえ よしひさ  
大阪大学大学院工学研究科教授

## 普遍性と特異性

現代美術が好きで、海外に出かけたときなど、ときどき現代美術館や街のギャラリーをのぞくことがある。先日も、韓国化学会年会での講演を依頼されてソウルに行った折に、学会の終わった土曜日の午後、南郊にある韓国現代美術館に連れていってもらった。かなり大きな3階建ての建物で、正面入口を入ったところがニューヨークのグッゲンハイム美術館を少しコピーしたような円筒形の建物で内部に螺旋状のスロープがしつらえてあり、その内部の外側の壁面にも絵が展示してあり、さらに各フロアの展示会場にも行けるようになっていてという造りである。その螺旋状スロープの真ん中には、韓国の大手電機メーカーSamsungのテレビを200台以上パベルの塔のように積み上げ、画面にはポップアート風の映像を流すという70年代に流行ったような作品がどーんと展示してあり、「あー、あれね」と思わずオリジナルが分かるような仕組み(?)になっている。

現代美術には世界的な流れやハヤリみたいなものがあるって、同時期にどの国でも同じようなものが作られているようなところも確かにある。しかし、既成の枠にとらわれないのが現代美術の現代美術たる所以でもあり、存在意義でもあるので、かえってそれぞれの民族の持つ想像力が自由に羽ばたけるところがあるようで、民族特異性みたいなものが表れてなかなか面白いものである。

しかし、本質的に現代美術というのは人間の(右)脳が持つ想像力と創造力の限界に挑戦し、伝統美術における「様式美」の呪縛を解き放ち、これまでにない全く新しい造形を作り上げることによって、その限界を乗り越えて、表現の可能性の領域を拡張してきたところに存在価値があるといえる。また、少なくともそれが大衆のある部分に共鳴するところがあるって、曲がりなりにも受け入れられ、芸術として成り立つわけである。それでも、現代美術の造り手自身が育ってきた歴史的・文化的・社会的背景に負っている、あるいは縛られている部分も大きく、その枠組みの上でどのような創造力の翼を羽ばたかせるかということになるのだろう。この歴史的・文化的・社会的背景こそが、世界的な流れの中にもありながらも各国で独自の現代美術が行われている根源かも知れない。

## 「様式美」の科学

同じようなことは、科学の研究についてもいえないだろうか。現代のように論文が正式に出版される前にウェブサイト上で読めたり、頻繁に開かれる国際会議で情報交換が行われたりするような時代においては、科学のどの分野においても世界中で取り組んでいる研究テーマが似かよってしまうのが現実である。その意味で、すべては「現代」科学のはずであるが、果たして伝統芸術に対応する「伝統」科学というものは存在しないのだろうか？研究テーマの選び方や研究の進め方の面から見ると、意外にそれに

類するものが形を変えて存在しているのが見受けられる．とくに，日本では「様式美の科学・技術」といえるようなものが厳然と存在するのではないだろうか．分析化学の分野について見ても，新しい方法論の開発はまれであり，既存の分析手法の中でいかにその技術を高度化・精緻化させるかに努力している人的・予算的・時間的な割合が，結構高いのではないか？ 既存技術の根本は踏まえながらも，それを乗り越えるような新しい方法論を開発する努力をしない限り，象徴的な意味での「様式美の完成」という閉じた空間の内部の充実化に腐心することになりかねず，それだけでは本質的・革新的な分析技術の進歩は望めないだろう．もちろん，内面の充実化・精緻化という部分の必要性や重要性を否定するものではなく，それを踏まえた上で，ときどきは枠の向こう側をのぞく努力をしてみてもどうだろうかという提案ではあるが・・・

## 創造力の翼

その点で気になるのは，果たして現代科学(特に，化学)は現代美術と同じ程度に我々科学技術者の(左)脳に与えられた能力の限界まで創造力の翼を羽ばたかせているかということである．まあひいき目に見てもとてもそうとは言えないのが日本の科学の現状ではないかと思うが，遺伝子といえればみんなが遺伝子の研究をし，次は脳だといえればこぞってその方向に走る生物業界に比べれば，化学は比較的バラエティーに富んだ研究領域を維持している方だと言える．逆に，多くの研究領域を包括的に縛るような強力なドグマみたいなものがないので，様式化に落ち込まない限り，意外に自由度はある．あとは，具体的にどうするかという問題だけだろう．以前にも書いたことがあるが，大事なものは「やってみなわからへんやないか！」という既成概念にとらわれない知的好奇心だと思う．化学の面白さは，原理原則から演繹的に研究を進めたり，それを実験的に証明するための研究というのは余りなく，現場主義というか，「当たって砕ける」的，あるいは「ダメもと」的な研究が許される点だろう．

## 大阪的・楽観的科学研究のすすめ

その意味では，「おもろいと思うなら，ひとつやってみなはれ」という大阪の気風は非常に化学の研究に向いているかも知れない．極言すると，化学における真理は患者の試行錯誤と一瞬のひらめきによって到達できるという気がするので，これまでの既成概念は踏まえた上で，その外側で一度バカになってみてとにかくやってみる．そこに科学全般への知的好奇心と，問題解決に向けた「継続的・潜在意識的な集中的思考」があれば，いい結果が出ると信じて努力する者の上に神のめぐみは自ずと降りてくるのが化学研究ではないだろうか．かなり楽観的な私の研究信条でもある．試みられてはいかがだろうか？



### 著者略歴

1972年 大阪大学工学部応用化学科卒業  
1977年 大阪大学大学院工学研究科博士課程修了  
工学博士  
1977年 姫路工業大学工学部助手  
1978～1979年 米国コロンビア大学博士研究員  
(N. J. Turro教授)  
1985年 姫路工業大学工学基礎研究所助教授  
1990年 姫路工業大学理学部助教授  
1992～1994年 新技術事業団独創的個人研究育成事業  
「さきがけ研究(PRESTO)」 「光と物質」  
領域 個人研究者(兼務)  
1994年 大阪大学工学部教授  
1995年 大阪大学大学院工学研究科教授  
1996～2001年 科学技術振興事業団 創造科学技術推進  
事業(ERATO) 「井上光不斉反応プロ  
ジェクト」 総括責任者(兼務)  
主な要職，受賞歴  
1983年 日本化学会進歩賞  
1998年 光化学協会賞